

# 5,6世紀朝鮮半島西南部における「倭系古墳」の造営背景

An Analysis of the Background of Japanese-style Tombs Built in the Southwestern Korean Peninsula in the Fifth and Sixth Centuries

高田貫太

TAKATA Kanta

はじめに

①朝鮮半島西・南海岸地域における「倭系古墳」の造営背景

②榮山江流域における前方後円墳の造営背景

おわりに

## 【論文要旨】

近年、朝鮮半島西南部で5,6世紀に倭の墓制を総体的に採用した「倭系古墳」が築かれた状況が明らかになりつつある。本稿では、大きく5世紀前半に朝鮮半島の西・南海岸地域に造営された「倭系古墳」、5世紀後半から6世紀前半頃に造営された榮山江流域の前方後円墳の造営背景について検討した。

5世紀前半頃に造営された西・南海岸地域の「倭系古墳」を構成する諸属性を検討すると、臨海性が高く、北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。よって、その被葬者はあまり在地化はせずに異質な存在として葬られたと考えられ、倭の対百済、榮山江流域の交渉を実質的に担った倭系渡来人として評価できる。そして、西・南海岸地域の在地系の古墳には、多様な系譜の副葬品が認められることから、海上交通を基盤とした地域集団の存在がうかがえる。倭と百済、または榮山江流域との交渉は、このような交渉経路沿いの要衝地に点在する地域集団の深い関与のもとで、積み重ねられていたと考えられる。

5世紀後半から6世紀前半頃、榮山江流域に造営された前方後円墳と、在地系の高塚古墳には、古墳の諸属性において共通性と差異性が認められる。これまで両者の関係は排他的もしくは対立的と把握される場合が多かったが、いずれの造営集団も、様々な交通路を利用した「地域ネットワーク」に参画し、倭や百済からの新来の墓制を受容していたという点において、併存的と評価すべきである。したがって、前方後円墳か在地系の高塚古墳かという違いは、諸地域集団の立場からみれば、新来の墓制に対する主体的な取捨選択の結果、ひいては百済中央や倭系渡来人集団との関わり合い方の違いの結果と評価できる。

このような意味合いにおいて、その被葬者は基本的には百済や倭と緊密な関係を有した榮山江流域の諸地域集団の首長層と考えられる。ただし、倭や百済との活発な交渉、そこから渡来した集団の一部が定着した可能性も考慮すれば、その首長層に百済、倭に出自を有する人々が含まれていた可能性もまた、考慮しておく必要はある。

【キーワード】 榮山江流域、前方後円墳、倭系古墳、渡来人、古墳時代

## はじめに

近年、朝鮮半島西南部で5, 6世紀に倭の墓制を総体的に採用した古墳（以下、「倭系古墳」）が築かれた状況が明らかになりつつある。その被葬者の性格や当時の日朝関係における役割について、日韓の研究者が検討を進め、多くの成果を挙げてきた。古墳時代の日朝関係史を専門とする筆者にとっても、この課題を避けて通ることはできず、これまでいくつかの予察を発表した。その際に留意した点は主に2つある。1つは、日本考古学における古墳時代の日朝関係史研究の課題を浮き彫りにすることである。すなわち、少なくとも1990年代までは自明とされてきた、倭王権による主体的な朝鮮半島への軍事的活動、古墳時代当初からの対外交渉権の一元的な掌握、という解釈の再検討である。もう1つが、日朝の地域社会の視座から交渉史を検討すること、すなわち対外交渉をめぐる王権と地域社会の政治経済的関係について、その多様性、錯綜性に焦点を定めて動的に把握することの必要性である。このような課題を踏まえつつ、朝鮮半島西南部で確認が相次ぐ5, 6世紀の「倭系古墳」の分析を通して、当時の倭と百済、栄山江流域との交渉の様態を、それらの造営に携わった（と予想される）地域社会の側から明らかにしていくことには大きな意義があると考えている。

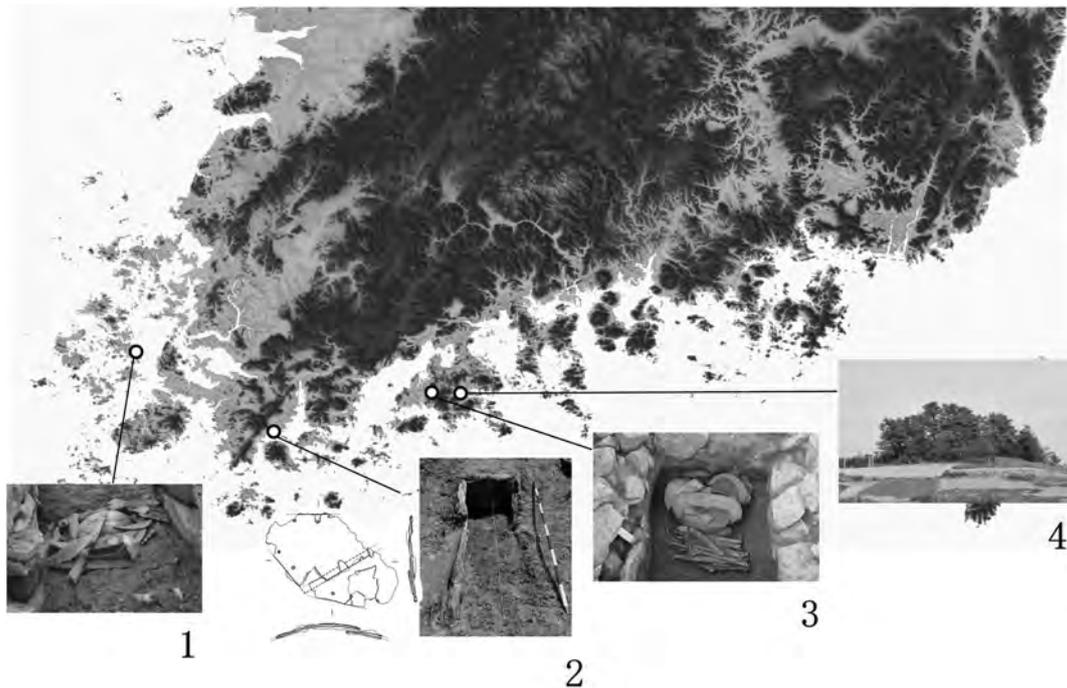
本稿では、これまでの筆者の予察を総合化する形で、大きく5世紀前半に朝鮮半島の西・南海岸地域に造営された「倭系古墳」<sup>(1)</sup>、5世紀後葉から6世紀前半頃に造営された栄山江流域の前方後円墳の造営背景について考えてみたい。まず、第1節において、5世紀前半頃に造営された西南海岸地域の「倭系古墳」を構成する諸属性を概観しつつ、造営された地域の古墳や集落との対比から、その性格について明らかにする。その中で、当時の倭と百済、栄山江流域の交渉の様態を検討してみたい。次に第2節において、5世紀後葉から6世紀前半頃に造営された、栄山江流域の前方後円墳の築造の歴史的背景を、同時期の在り系高塚古墳との比較や古代交通路との関わりの検討を通して、考察する。これまでの先行研究については、論を展開する中で随時触れていきたい。

## ①……………朝鮮半島西・南海岸地域における「倭系古墳」の造営背景

### 1 「倭系古墳」を構成する諸属性の概観

近年、朝鮮半島の西南海岸地域を中心に5世紀前半頃の築造と想定される「倭系古墳」の確認が相次ぎ、研究が進展している〔国立羅州文化財研究所2014aなど〕。ここでは発掘調査が行われ、その成果が公開された全羅南道高興野幕古墳〔国立羅州文化財研究所2014b〕、同吉頭里雁洞古墳〔全南大学校博物館2011、全南大学校博物館・（財）湖南文化財研究院ほか2015〕、海南外島1・2号墳〔国立光州博物館・海南郡2001〕、新安ベノルリ（배널리）3号墳〔東新大学校文化博物館2015〕を中心に（図1）、古墳を構成する諸属性や造営時期について概観してみたい。<sup>(2)</sup>

**立地** 高興野幕古墳は高興湾を眺望できる丘陵の頂部に位置している。丘陵の高さは海拔35m程で、高興湾とその周辺の景観を一望できる良好な立地である。他の古墳もそれぞれ海に面



1. 新安ペノルリ3号墳 2. 海南外島1号墳 3. 高興野幕古墳 4. 高興吉頭里雁洞古墳

図1 西・南海岸地域における5世紀前半頃の主な「倭系古墳」

した低丘陵（雁洞）や小島（外島，ペノルリ）に築かれている。いずれの古墳も臨海性が高く，独立的に立地し，その築造を契機として周囲に古墳群が形成されることはない。また，周辺に同時期の上位階層の墳墓が見当たらないようであるが，この点については今後の調査が必要である。例えば，海南地域の外島1・2号墳の場合には周辺に在地系の方台形墳の海南新月里古墳が位置している。両者の関係については後に検討してみたい。

**墳丘と外表施設** 野幕古墳は径22m程の円墳，雁洞古墳は径36m程の円墳，外島1号墳も径23m程の円墳と推定されている。一方で，ペノルリ3号墳は8m×6.4m程の円墳と推定され，他の古墳に比して小型である。また，野幕古墳と雁洞古墳では墳丘斜面における葺石の存在が明らかとなっている。

**埋葬施設** すでに指摘のあるように〔金洛中2013〕，野幕，外島1・2号，ペノルリ3号の埋葬施設は，北部九州地域に分布する竪穴式石室や箱式石棺との関連を考慮する必要がある（図2）。例えば，ペノルリ3号墳の竪穴式石室は両短壁に板石を立てている点，平面形が2m×0.45mと細長方形で直葬の可能性が高い点などから，北部九州地域で盛行した石棺系竪穴式石室の範疇に属するものと判断できる。

また，野幕古墳の埋葬施設も平面細長方形で控え積みの幅が幅広い点などは，北部九州地域の竪穴式石室と類似する。調査報告書では，四壁の石の積み方が粗雑である点，副葬品が床面直上ではなく堆積土の下部から出土した点などから，石室内に木槨が存在した可能性を想定している〔権宅章2013，国立羅州文化財研究所2014〕。また，蓋石が確認されず木蓋の可能性（もしくは木製構造物の蓋が石室上面を覆う機能を兼ねていた可能性）が指摘されている点も特徴的である。北部九州

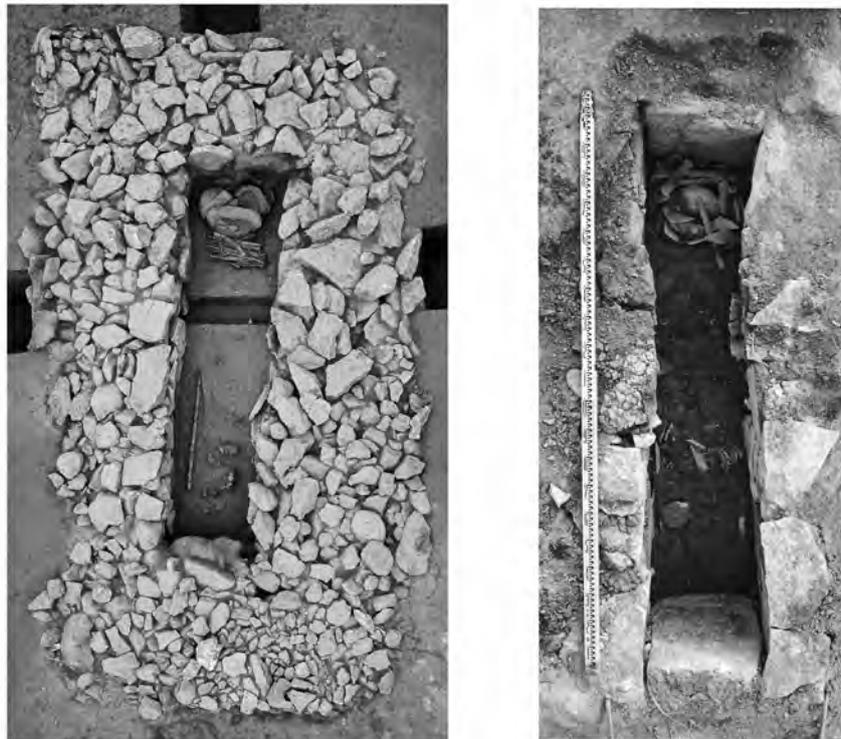


図2 野幕古墳(左)とベノルリ3号墳(右)の竖穴式石室

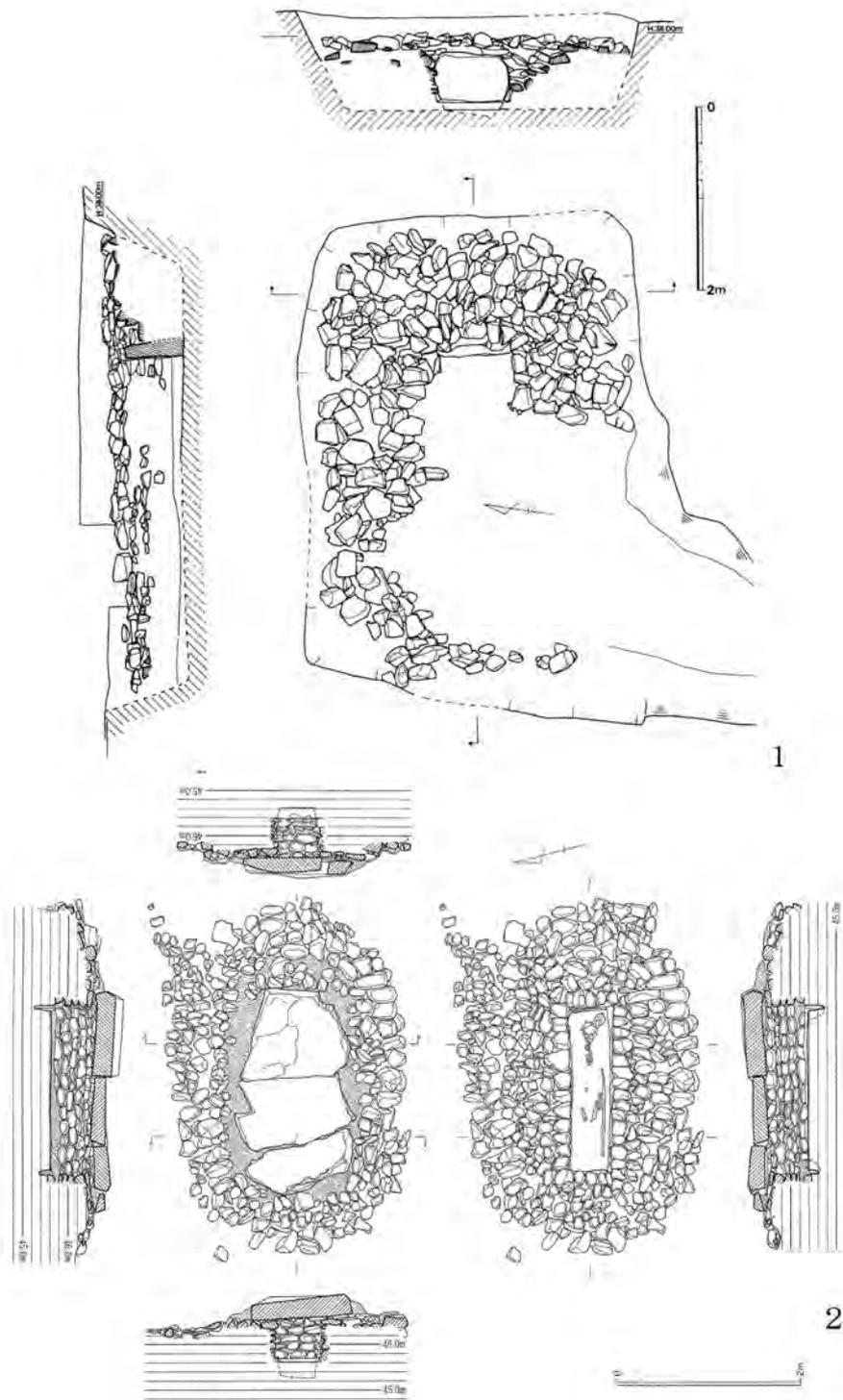
地域の竖穴式石室(図3)の中にも、例えば福岡県七夕池古墳[志免町教育委員会2001]のように、石室内部に木棺が存在したと推定できる事例はある。そして、墳丘盛土の途中に埋葬施設構築用の作業面を設けた後に、埋葬施設の構築と墳丘の盛土を並行して行うという造営過程についても、野幕と七夕池は共通である。

雁洞古墳の埋葬施設については、平面形がいわゆる「羽子板」形を呈する点、壁面に赤色顔料を塗布する点などに倭系の要素が認められることは確かである。筆者は竖穴系横口式石室を意識した埋葬施設である可能性を提示した[高田貫太2016]。

**副葬品** 野幕古墳(三角板革綴短甲, 三角板革綴衝角付冑), 雁洞古墳(長方板革綴短甲, 小札鉾留眉庇付冑2点), 外島1号墳(三角板革綴短甲), ベノルリ3号墳(三角板革綴短甲, 三角板鉾留衝角付冑)と、いずれの古墳にも倭系の帯金式甲冑が副葬されている点は特筆される。日本における甲冑研究を参考とすれば[鈴木2012・2014, 橋本2014など], いわゆる「鉾留技法導入期」, 古墳時代中期中葉頃に対応する資料と評価できる。

また、野幕古墳やベノルリ3号墳で出土した鉄鏃についても鳥舌鏃や短頸片刃鏃などからみて、甲冑と並行する時期に位置付けられるものが主体を占めているようである。特に、この2古墳から出土した主要な武器・武具類については、一括で倭から移入された可能性が高い。そして、竖櫛や勾玉などの装身具(野幕), 甲冑と鏡の共伴様相(野幕, 雁洞, ベノルリ3号)[上野2012], 埋葬施設内部に土器を副葬しない点なども倭との共通性が高い。

一方で、雁洞古墳からは百濟系の金銅製冠帽や飾履が出土している。すでに詳細な検討がなされ、



1. 福岡県笹原古墳 2. 福岡県七夕池古墳

図3 北部九州地域の竖穴式石室



1. 草堂山古墳 2. ベノルリ3号墳  
3. 外島1・2号墳

図4 木浦玉岩洞草堂山古墳

「百済の金属製装身具の特徴を忠実に備えて」おり、「製作技法やその水準からみれば、百済の王都たる漢城において製作されたもの」として理解されている〔李漢祥 2011：p.70〕。そして、多様な玉類や、儀仗の性格が強い鉄柄の鍬（갈）なども百済系と把握することができよう。

このように、野幕、雁洞、外島1・2号、ベノルリ3号の諸古墳は、外表施設、埋葬施設、副葬品など倭系の要素が色濃く認められ、総体的に倭の墓制を取り入れたものと判断できる。その築造時期はおおむね5世紀前半頃であろう。特に古墳の全体的な様相が明らかな野幕とベノルリ3号は、北部九州地域における同時期の中小古墳の様相と酷似している。「倭系古墳」として評価される所以である。一方で、雁洞古墳から出土した装身具や儀仗の鍬は、その被葬者や造営集団と百済王権との政治的関係を如実に示している。

**木浦玉岩洞草堂山古墳** このような臨海性の高い「倭系古墳」は、今後も西・南海岸地域において確認される可能性は高い。その一例として木浦玉岩洞草堂山古墳〔国立羅州文化財研究所 2011：p.169〕を挙げておきたい（図4）。この古墳は現状で径18～20m程の

円墳と推定されており、墳丘周辺に石材が散在している状況が報告されている。現地を踏査した結果、確かに墳丘斜面に割石が散在しており、これは墳丘に葺かれた葺石の可能性がある。また、榮山江の河口北岸の独立丘陵の頂部に位置しており、河口やその周囲の景観を眺望できる。そして、河口堰が築かれる以前には、古墳の位置する丘陵から南方200m程まで潮が満ちることもあったとされる。

草堂山古墳は未調査であり、造営時期は不明とせざるを得ないが、立地の臨海性や葺石を有すると想定できることから、あるいは上述の「倭系古墳」と同様の性格を有している可能性もある。

## 2 「倭系古墳」の立地する地域の性格

**海上交通を基盤とする地域集団** これまで整理したような特徴を有する「倭系古墳」の性格は、どのようなものであろうか。この点を明らかにするためには、直ちに「倭系古墳」の被葬者論を展開するのではなく、まずは、「倭系古墳」が位置する諸地域に経済的基盤を置き、おそらく「倭系古墳」の造営にも関与した地域集団の姿を浮き彫りにすることが重要である。「倭系古墳」の立地や西・南海岸地域の地理的特性については、次のようにまとめることができる。

- ①「倭系古墳」は西・南海岸地域の島嶼部、すなわち海岸を伝う沿岸航路の要衝地に立地する。
- ②この地域はリアス式の海岸で海岸線が複雑に入り組んでおり、潮汐の干満差が非常に大きく、

それによって発生する潮流は航海の上で障害となる。

③特に麗水半島から新安郡に至る地域は多島海地域であり、狭い海峡が連続し、非常に強い潮流が発生する。そのために、現在においても航海が難しい地域である。

①～③から推察すれば、すでに指摘のあるように〔権宅章ほか2013, 金洛中2013など〕, 西・南海岸地域を伝う沿岸航路を活用する場合、現地の複雑な海上地理や潮流を正確に把握する必要があり、それを最も熟知していたのは西・南海岸諸地域の集団であったと考えられる。したがって、これらの地域集団は西・南海岸沿いの沿岸航路を活用した海上交通を主たる政治経済的な基盤としていた可能性が高い。

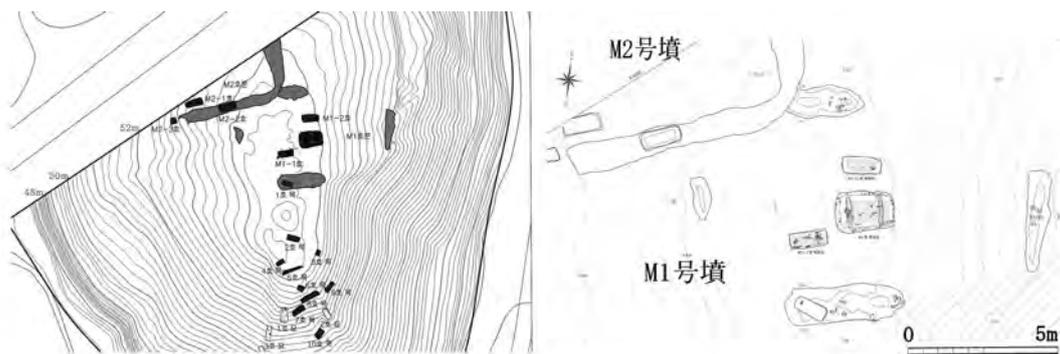
**地域集団の墓制と集落—高興地域を事例として—** このような沿岸航路の要衝を根拠地とした地域集団は、「倭系古墳」が築かれる5世紀前半頃には、どのような墓制や集落を営んでいたのだろうか。ここでは高興地域を事例として取り上げたい。野幕古墳や雁洞古墳が位置する高興半島では他の墳墓の発掘調査はほとんど行われていないが、半島の基部にあたる地域ではいくつかの調査が行われている。その中で高興掌德里獐洞遺跡〔高興郡・大韓文化遺産研究センター2011〕と高興寒泉里新村遺跡〔馬韓文化財研究院2011〕に注目する。

獐洞遺跡(図5・6)では、周溝をめぐらせ内部に複数の木槨を設置するM1, M2号墳と、単独の木槨墓10基が確認された。調査報告書ではM1, M2号墳の造営時期を5世紀前半頃と想定している。ただ、M2-1号墓で出土した台付把手付壺(図6-2)の型式からみると、もう少しさかのぼる可能性もある。副葬土器や周溝出土の土器をみると、金海・釜山地域系(台付把手付壺など)、慶南西部地域系(広口壺)、榮山江流域系(蓋杯、口縁部短く外反する椀、両耳付壺など)などが出土し、さらには有孔広口小壺も確認されるなど、非常に多様である。

また、新村遺跡は獐洞遺跡の近隣、北へ1.5kmほどに位置しており、獐洞遺跡と同様な墓制が確認されている。やはり副葬された土器の中に外来のものが含まれる点が特徴的で、金海・釜山地域系や咸安地域系のものが確認できる。

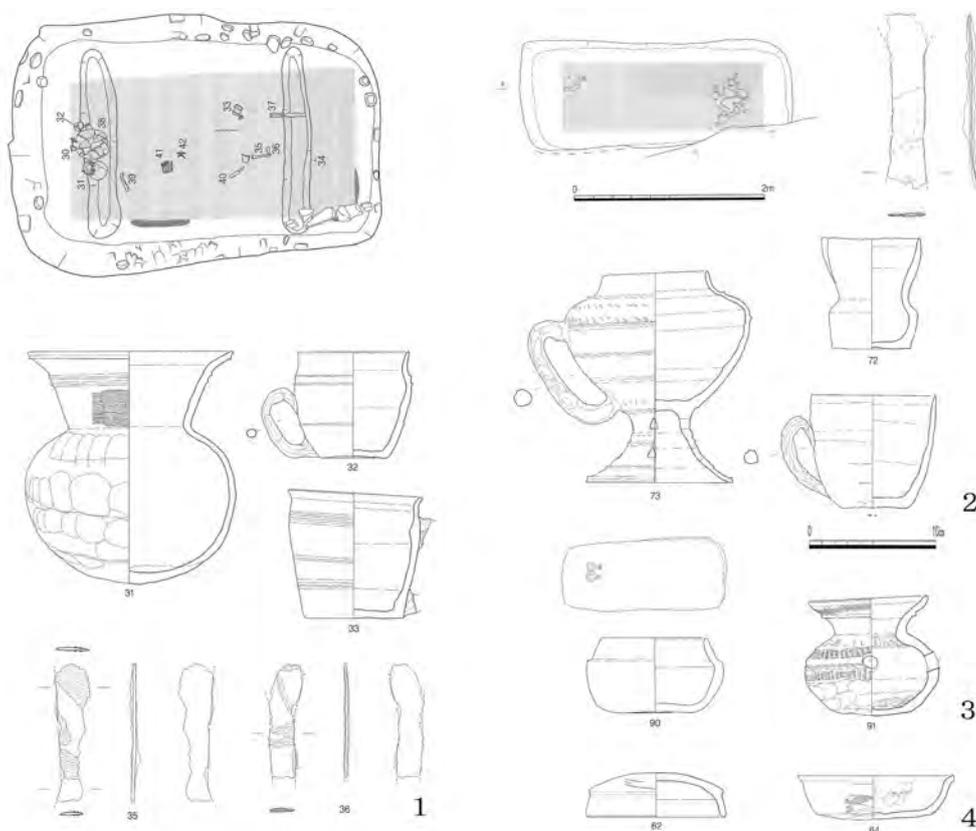
高興半島基部の墓制を整理した李暎澈は、獐洞遺跡のM1, M2号墳を「多葬墳丘墓伝統の梯形古墳」と評価し、それが「榮山江流域圏で一般化する墓制の類型」であり、現状ではその分布の東限となることを指摘する〔李暎澈2011b:p.218〕。そして、埋葬施設が単独木槨墓も含めていずれも木槨構造であり、副葬品に加耶系のものが主流を占めている点から、その造営集団は「高興半島一帯においては多少なじみの薄い埋葬風習を有していた集団」であり、「小加耶や金官加耶をはじめとする加耶地域と活発な交流関係を展開していた」と想定している〔李暎澈2011b:p.218〕。氏の見解は妥当性が高く、獐洞遺跡や新村遺跡が汝自湾から内陸へ至る交通路沿いに位置する点も勘案すれば、この地域の集団は、西・南海岸沿いの沿岸航路や内陸部への陸路を活用した「交易」活動を政治経済的な基盤としていたと判断できる。

このような性格を有する地域集団が、野幕古墳や雁洞古墳が築かれた5世紀前半頃の高興半島一帯にも存在していたか否かについては、今後の発掘調査成果を期待するよりほかはない。ただし、野幕古墳の近隣で高興湾に面する微高地状には、4, 5世紀代に寒東遺跡〔湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006a〕や訪士遺跡〔湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006b〕などの集落が営まれたことが確認されている。そして、これらの集落遺跡からは、榮山江流域や諸加耶に系譜を追え



遺構分布図

图5 高興掌德里獐洞遺跡



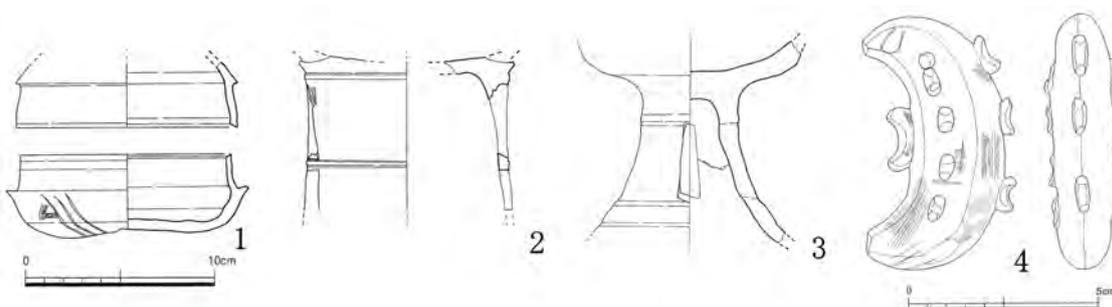
1. M1号木槨墓

2. M2-1号木槨墓

3. 1号木槨墓(单独木槨墓)

4. M1号墳周溝

图6 獐洞遺跡の埋葬施設と出土遺物



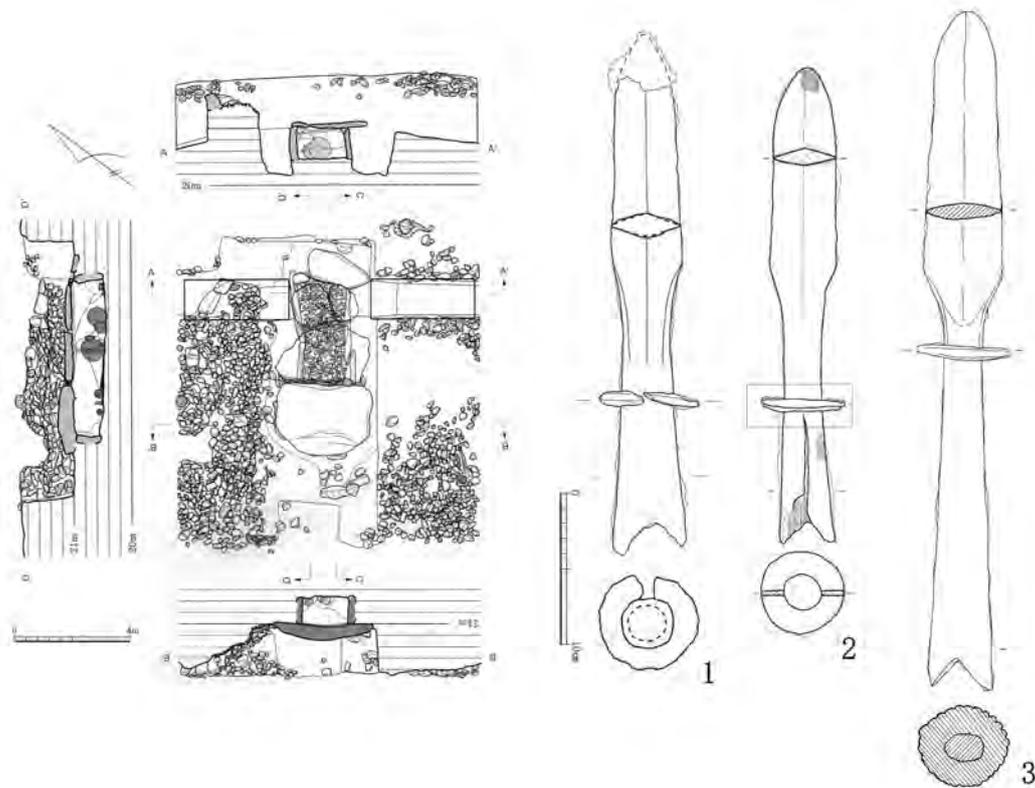
1. 寒東18号住居址

2. 寒東21号住居址

3. 訪士18号住居址

4. 訪士39-4号住居址

图7 高興寒東・訪士遺跡出土遺物



1. 海南新月里古墳 2. 瑞山富長里5号墳1号土壙墓 3. 天安龍院里9号石槨墓

図8 海南新月里古墳の埋葬施設と鐔付鉄鉞の類例

る土器、倭系の須恵器系土器、子持勾玉などが出土し（図7）、調査報告書の中で、集団の活発な対外活動がすでに指摘されている。したがって、高興半島にも海上交通に深く携わった、いくつかの地域集団が存在していた可能性は高い。

**海南北日面一帯の地域集団** 外島1・2号墳が造営された海南半島北日面一帯においても、このような地域集団の存在は想定できそうである。この想定の本拠となるのは、海南新月里古墳〔木浦大学校博物館・海南郡2010〕である（図8）。新月里古墳は短辺14m×長辺20m程の規模を有する在地系の方台形墳である。埋葬施設は外島1・2号墳と同様の箱式石棺であり、壁石と天井石に赤色顔料を塗布している。また墳丘には葺石を有している。その副葬土器は栄山江流域に通有な土器群と判断されるが、鉄製品に鐔付鉄鉞が含まれている点に注目できる（図8-1）。

鐔付鉄鉞は主に洛東江以東地域を中心に分布するが、鐔が袋部の上部や中間に取り付けられる古相の資料については、漢城百済圏にも分布する〔図8-2・3 高田2002〕。新月里古墳の鐔付鉄鉞は袋部の中間に鐔を取り付けた古相の資料であり、漢城百済圏との関係の中で、移入もしくは現地で製作された可能性が高い。新月里古墳の造営時期については今一つ判然としないが、出土土器や鐔付鉄鉞から判断すれば、あるいは外島1・2号墳と同時期かそれほど遅くはない時期であった可能性もある<sup>(3)</sup>。葺石や埋葬施設に認められる倭系要素や、鐔付鉄鉞から垣間見える漢城百済圏との関係を勘案すれば、その造営集団はやはり海上交通を基盤とした地域集団であったと考えられる。

**西・南海岸地域に展開する「地域ネットワーク」** 以上のように、海上交通を基盤としていた

地域集団が西・南海岸地域には点在していた可能性が高い。彼らが活発な地域間交渉を行っていたとすれば、少なくとも5世紀前半頃の西・南海岸地域には、物資、技術、情報、祭祀方式などをやりとりする「地域ネットワーク」とでも呼ぶべき関係網が形成されていた、と想定できる。

### 3 「倭系古墳」造営の背景

**「倭系古墳」の被葬者像** 次に、これまでの検討に基づいて「倭系古墳」の被葬者像を想定してみたい。「倭系古墳」に認められる倭系、あるいは百済系の属性（雁洞古墳出土の装身具や儀仗用の鏝など）、そして扶安竹幕洞祭祀遺跡や福岡県沖ノ島祭祀遺跡の存在から判断すれば、西・南海岸を伝う沿岸航路が百済や栄山江流域、そして倭の主要な交渉経路であったことは、容易に想定される。具体的には、漢城百済圏－西・南海岸地域の島嶼部－広義の対馬（大韓・朝鮮）海峡－倭という経路であり、無論、栄山江流域－栄山江－南海岸の島嶼部－海峡－倭というような経路も想定できる。

先に述べたように、この経路上の点在する「倭系古墳」は単独的に造営され、その造営を契機に周囲に古墳群が形成されることはない、また、倭、特に北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。このことから、その被葬者はあまり在地化はせずに異質な存在として葬られたと考えられ、倭の対百済、栄山江流域の交渉を実質的に担った倭系渡来人として評価できそうである。

ただし、雁洞古墳の被葬者については、百済系の装身具や鏝が副葬されていることから、出自が倭にあるとしても百済との深い政治的関係を有していたことも確かである。その意味で、倭と百済の政治経済的なつながりを取り結ぶような立場にあった、複属性を備えた人物と考えてみたい。

**倭系集団による西・南海岸地域のネットワークへの参画** このように「倭系古墳」の被葬者像を想定した場合、次に問題となるのは、被葬者やそれを取り巻く倭系渡来人集団が、百済や栄山江流域など目的地への航行や、それらとの交渉という任務を、いかにして円滑に遂行しようとしたのか、という点である。これを考古学的に検討することは至極難しい。ただ、西・南海岸地域の地理的特性を鑑みる時、少なくとも倭系渡来人集団のみでは沿岸航路の航行は至極困難であったことは想像に難くない〔権宅章ほか2013、金洛中2013など〕。

したがって、円滑な航行には複雑な海上地理と潮流を熟知する地域集団の仲介が不可欠であったろう。おそらく倭系渡来人集団は、西・南海岸地域に形成されていたネットワークへの参画を企図し、在地の諸集団との交流を重ねつつ、航路沿いの港口を「寄港地」として活用することや航行の案内を依頼していたのではなかろうか。すなわち、倭の対百済、栄山江流域の交渉は、西・南海岸の諸地域との関わりがあって初めて円滑に遂行できた可能性が高い。その場合、倭系渡来人集団が航行上の要衝地に一定期間滞在し、在地の集団と「雑居」していた可能性も十分にあり、そのような状況の中で「倭系古墳」が築かれたと想定する。

**女木島丸山古墳の百済系耳飾** このように、倭と百済、栄山江流域との交渉に島嶼部や海岸部の地域集団が関与していたことを示す事例は、実は、日本列島においてもいくつか確認できる。その一例として、香川県女木島丸山古墳〔森井1966〕を検討してみたい（図9）。

女木島は、九州地域と畿内地域を結ぶ基幹交通路たる瀬戸内海に位置する小さな島である。その

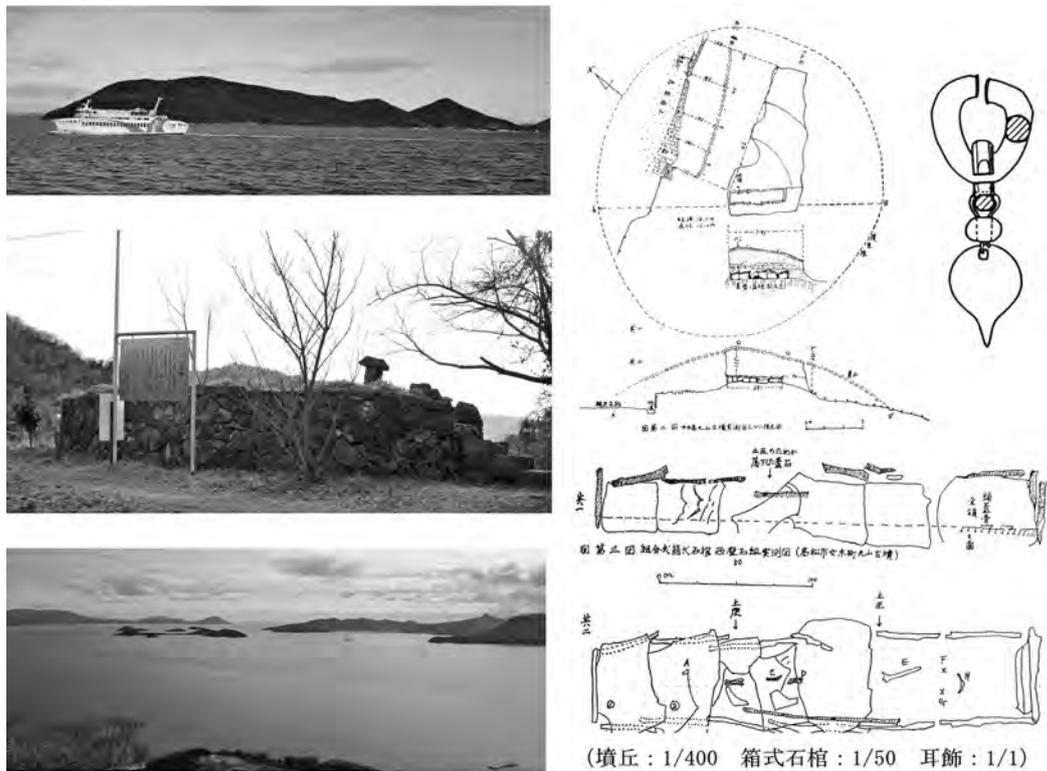


図9 女木島丸山古墳

(上. 女木島全景 中. 丸山古墳 下. 瀬戸内海の眺望)

丘陵の尾根筋に丸山古墳が位置している。短径14.5m、長径16m程の円墳と考えられ、埋葬施設は箱式石棺である。岩盤を浅く掘り込んで石棺を設置し、その後に墳丘を盛土し、墳丘表面を葺石で被覆している。副葬品としては曲刃鎌、大刀が確認され、そして垂飾付耳飾が被葬者に着装された状態で出土した。

この垂飾付耳飾は、主環+遊環+金製玉(中実)の中間飾+小型の宝珠形垂下飾という構成であり、垂下飾の先端を細長く強調する特徴がある。このような構成の耳飾は漢城期百済圏に系譜を求めることができる[高田2014]。また、中間飾が一般的な中空の空玉ではなく、中実の金製玉である点も特徴的である。このような中間飾も漢城期百済圏の清原や天安地域で確認できる。このような耳飾を着装していた被葬者については、百済からの渡来人、もしくは渡来人と密接な関わりを有した在地の有力層と想定できよう。

女木島からは瀬戸内海は無論のこと、当時の有力な地域社会であった讃岐地域や吉備地域の沿岸部を広く眺望できる。また、女木島付近の海域は多島海であり、狭い海峡が連続している。よって、丸山古墳の造営には、その海域を熟知し海上交通を基盤とした在地の集団が関与していた可能性が高い。

実は、瀬戸内沿岸の諸地域は5世紀代に「渡来系竪穴式石室」や木槨など朝鮮半島系の埋葬施設を採用しており、明瞭な地域性が看取できる。この点を根拠として、筆者は瀬戸内海を介在した物資や技術、情報、祭祀方式をやり取りするネットワークの存在を想定したことがある[高田2014]。

また、瀬戸内海沿岸の朝鮮半島系資料の分布状況を概観すると、河川の下流域や河口、入り江沿い、そして島嶼部などに分布しており、当時の瀬戸内海を介した往来が、陸岸の目標物を頼りに沿岸を航行する「地乗り方式」の航法であったことを傍証する〔高田2015〕。

このような状況証拠を積み重ねると、百済や栄山江流域から倭への使節や、日本列島への定着をもくろんだ渡来人集団もまた、瀬戸内の地域集団との交流を重ね、地域ネットワークに参画することを企図し、時には女木島を「寄港地」として利用することもあったと、想定してみることは許されよう。当時の交渉が双方向的であったことの証左となる。

**それぞれの交渉意図** 5世紀前半頃の政治的状況を俯瞰すれば、百済は高句麗の南征への対応策の1つとして倭との提携を模索していたようであり、倭の側にも朝鮮半島系文化の受容という交渉意図があったと考えられる〔高田2014〕。そして栄山江流域についても、百済のある程度の関与はあったとしても、活発な対外交渉活動を政治経済的な基盤としていたことはうかがえる。このような相互の交渉意図が複雑に絡み合った倭と百済、栄山江流域の交渉が、日朝両地域の島嶼部に分布する「倭系古墳」や朝鮮半島系の古墳の確認によって、実は、交渉経路沿いの要衝地に点在する地域集団の深い関与のもとで、積み重ねられていたことが浮き彫りになりつつある。

今後は、この地域集団がどのような意図で渡海する渡来人集団との交流を重ねたのか、という観点からも当時の日朝交渉を紐解いてゆく必要がある。

## ②……………栄山江流域における前方後円墳の造営背景

次に、5世紀後葉から6世紀前半頃に造営された栄山江流域の前方後円墳について検討する。<sup>(4)</sup>1990年代後半以降に、その年代、墳丘構造、埋葬施設や埴輪（円筒形土製品）・副葬品の系譜、被葬者像、日朝関係史における位置づけ、百済王権との関わりなどが活発に議論され、前方後円墳の歴史的意義に迫る研究成果が相次いで発表された。代表的な研究成果としては、朝鮮学会編2002や大韓文化遺産研究センター編2011などを挙げるができる。特に前方後円墳の被葬者の性格について論争が本格化し、現在に至っている。その内容は論者ごとに多様であるが、大きくは「在地首長説」、<sup>(4)</sup>「倭系百済官人（僚）説」、そして「倭人説」などにまとめることができる。

被葬者論について現在においても議論が継続し、かつ厳しく対立しているのは、この問題が5、6世紀における栄山江流域における社会統合の度合い、百済と栄山江流域の政治経済的関係、あるいは当時の日朝交渉の様態などを明らかにしていくうえで、避けては通れない課題であり、各論者が抱く歴史像が問われるからであろう。

その一方で、栄山江流域の前方後円墳の様々な属性（横穴式石室、玄室内の施設物、墳丘外表施設、副葬品など）に、倭系の要素のほかにも、百済系、在地系、そして加耶系の要素が認められることについては、ある程度の見解の一致をみている〔高田2012、大韓文化財研究院2014など〕。また、5世紀後葉から6世紀前半頃に相次いで築造されたという短期性や、栄山江流域における中心域たる羅州潘南面一帯を取り巻く外縁域に1,2基程度が築かれるという分散性についても、ほぼ共通の理解が得られているようでもある。前方後円墳に関する考古学的事象の基礎的な認識自体については、研究者間に大きな違いは認めにくい。

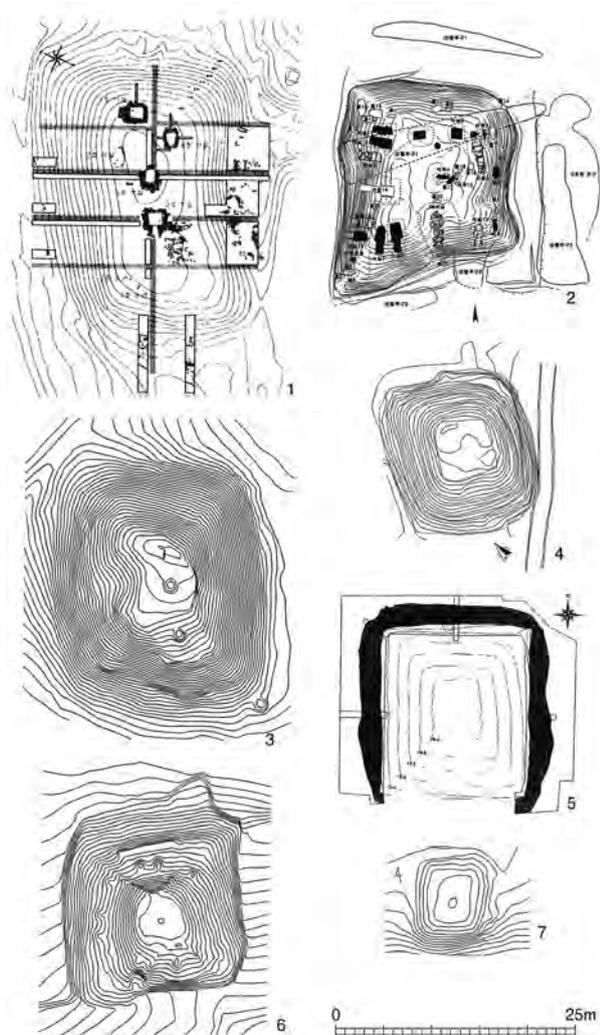
ここでは、前方後円墳が出現、展開する前後の時期、5世紀後葉から6世紀前半頃を1つの時期単位として把握する。そして、前方後円墳と在地系墓制の比較、その立地と古代交通路の相関性、集落との関わりなどの観点から前方後円墳の特質を浮き彫りにし、築造の背景を展望してみたい。

## 1 栄山江流域における前方後円墳の特質

**在地系墓制の特徴** まず、前方後円墳が造営される頃の在地系墓制の特徴を整理する。栄山江流域においては、おおむね5世紀中葉頃までは「複合梯形墳」[金洛中 2009]と呼ばれるような墳墓が築造される。この墳墓は平面楕円形もしくは台形状の低墳丘に、頸部を明瞭に形づくる専用甕棺や木棺（土壙）を墳丘の主軸に沿って複数設置するもので、広く盛行していた。その後、墳丘が大型化し、砲弾形の専用甕棺、あるいは横穴式石室を主たる埋葬施設とする高塚古墳が営まれるようになる（図10）。近年では、海南新月里古墳や霊岩沃野里方台形古墳[国立羅州文化財研究所 2012]など、5世紀前半～中葉頃に築造が遡り得る古墳が確認されるようにもなっている。

ともあれ、在地系の高塚古墳は方墳が主体をなしており、複数基、時には10基をこえる埋葬施設を同一墳丘に設置する点に大きな特徴がある。また、前時期の「複合梯形墳」の上部に高塚古墳を営むような場合もある。例えば、著名な羅州伏岩里3号墳[国立文化財研究所 2001a]の場合、複数の甕棺を順次埋納した低墳丘墓の造営から始まり（先行期）、その上部に高塚墳丘を造営しつつ、それに並行して九州系の1996年調査石室や複数の甕棺を造営し（Ⅰ期）、さらに百済系の横穴式石室（一部に在地系の要素を含む）を順次追加していくという段階（Ⅱ期）を経ている。先行期から7世紀前葉頃の最終埋葬までの長期にわたって断続的に単独の墳丘に埋葬行為を継続する。

高塚古墳の初期の事例たる霊岩沃野里方台形古墳では、5世紀前半頃に、方台形の高塚墳丘を造成しつつ構築墓壙を設けて縦穴式横口式石室を高塚墳丘の中央部に設置している。そして、5世紀後葉～6世紀初



1. 高敞鳳德里1号墳 2. 羅州伏岩里3号墳  
3. 咸平金山里米出古墳 4. 羅州新村里9号墳  
5. 霊岩沃野里1号方台形古墳 6. 務安高節里古墳  
7. 海南新月里古墳

図10 栄山江流域における主な在地系の高塚古墳

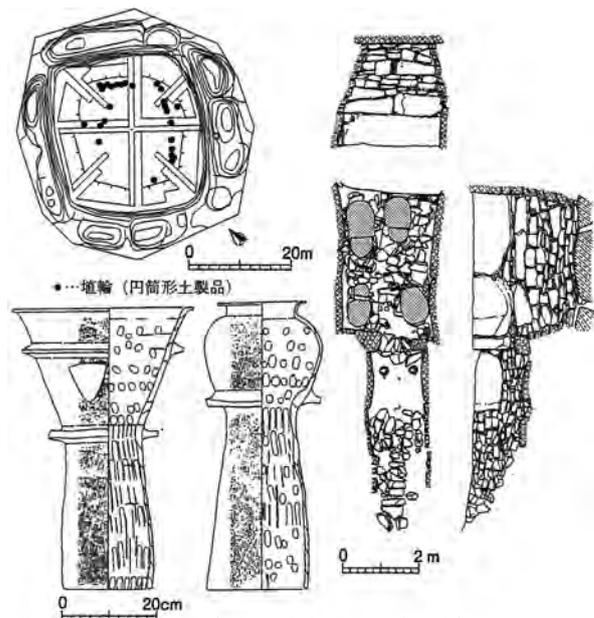
頭頃にかけて、その周囲に堅穴式石槨1基、甕棺3基、木棺1基を順次設置している。蘆嶺山脈以北に位置し、おそらく5世紀中葉頃までには百済系の横穴式石室を受容していた高敞鳳德里古墳群も同系統の墓制と判断される。1号墳〔馬韓・百済文化研究所・高敞郡2012〕の場合、自然地形を利用した高塚墳丘に堅穴式石室（堅穴系横口式石室？）や横穴式石室を5基、それに付随する甕棺を2基設置している。1つの墳丘に複数の埋葬施設を設置する行為自体は、羅州地域やその周辺域と共通である。

このように、横穴系の埋葬施設などの新たな墓制を受容し、副葬品などに様々な外来系器物を含みつつも、地域の伝統の中で変容を遂げていく在地系の高塚古墳は、基本的には榮山江流域の有力首長層の墳墓と評価してよいであろう<sup>(5)</sup>。今後の調査事例の増加を待って判断すべきではあるが、在地系の高塚古墳は、5世紀後半以降には榮山江流域中樞域たる羅州とその周辺域を中心に分布し、外縁の諸地域へはあまり広がりを見せないようである。このような状況は、遅くとも5世紀中葉頃までの低墳丘の「複合梯形墳」が、羅州を中心としつつ他地域にもよく広がっていた状況とは異なる。

**前方後円墳との比較** 以上のような特徴を有する在地系の高塚古墳と、前方後円墳を比較してみたい。まず埋葬施設についてみると、大きくは中北部九州地域に系譜を求められる横穴式石室の採用は、相互に共通である。また、5世紀前半頃からすでに受容されていた可能性が高い堅穴系横口式石室についても、系譜については今後の検討が必要であるが、その採用自体は共通である。次に外表施設については、在地系の高塚古墳の中にも葺石や埴輪（円筒形土製品）が確認された事例があり、やはり共通性が高い。そして、例えば咸平新徳1号前方後円墳のように、金箔ガラス玉や飾履、初期の金銅製広帯二山式帯冠（亀甲文を施す）などの各種装身具が副葬されるが、在地系の高塚古墳でも、例えば羅州伏岩里3号墳1996年調査石室のように金箔ガラス玉や金銅製飾履（亀甲文を施す）など多様な装身具が出土している。これらは、おおむね百済系を中心とした装身具で

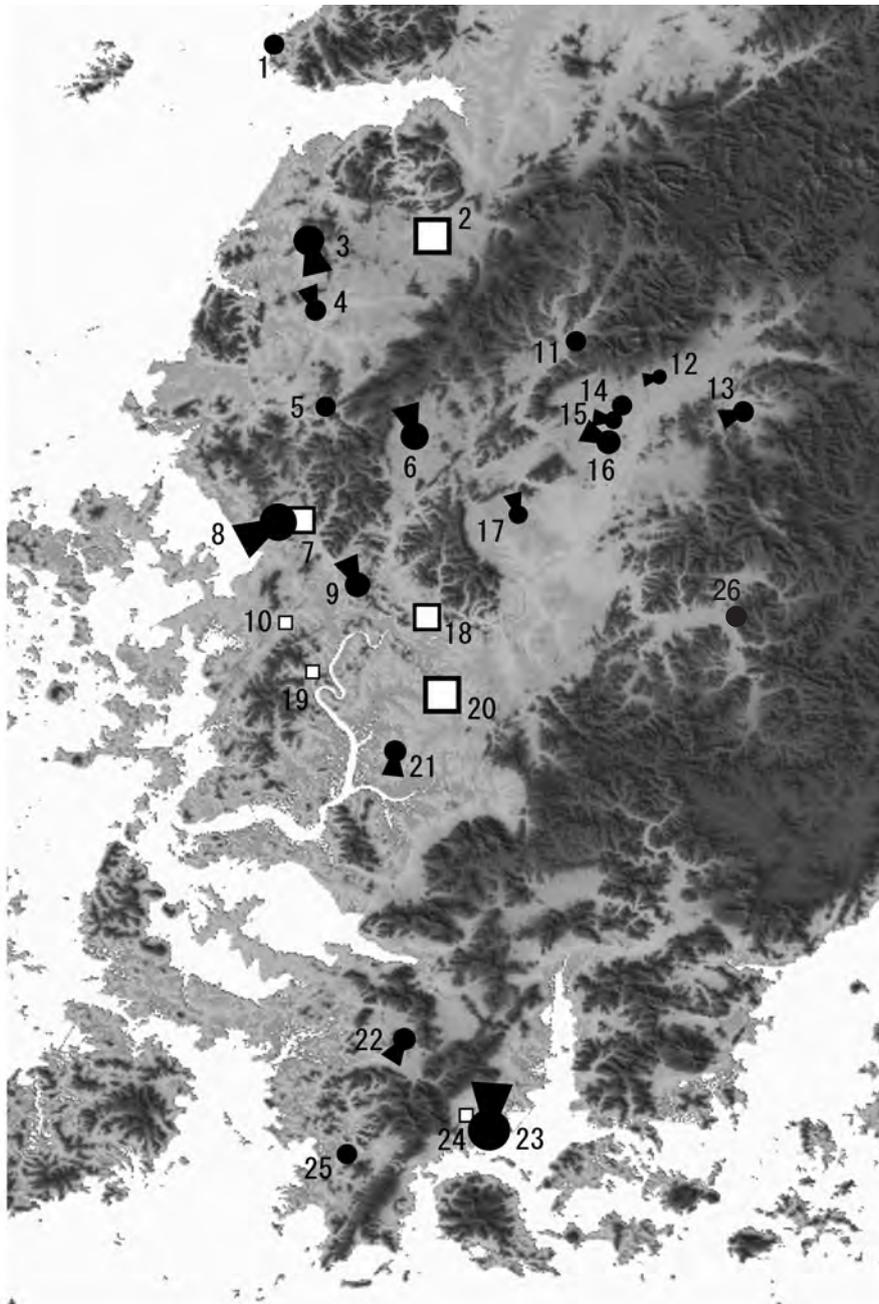
ある。さらに、釘や鏝を用いた木棺が屍身の保護に用いられる場合が多い点も共通的で、時には木棺に銀装釘や鏝座金具を備えている〔洪濬植2005など〕。このように、俯瞰的にみれば、埋葬施設、外表施設、副葬品などに外来系の要素を取り入れているという点において相互に共通する（図11）。

その一方で、墳丘形態、墳丘拡張の有無、そして前方後円墳が基本的に後円部中央に1基の横穴式石室を設置する点から、埋葬施設の数や埋葬を継続する期間において、相互に違いを確認できる。両者は墳墓としての用いられ方は明らかに異なっている。また、分布の面においても在地系の高塚古墳があまり認められない外縁域に、ほぼ確実な事例として現状で13基もの前方後円



左. 羅州新村里9号墳の埴輪  
右. 羅州伏岩里3号墳1996年調査石室

図11 在地系高塚古墳の埴輪と横穴式石室



▲：前方後円墳 ●：倭系・百済系の円墳 □：在地系の高塚古墳

1. 扶安竹幕洞祭祀遺跡 2. 高敞鳳德里古墳群 3. 高敞七岩里古墳群 4. 靈光月山里月桂1号墳  
 5. 靈光鶴丁里デチョン古墳群 6. 咸平礼德里新徳1号墳 7. 咸平金山里米出古墳  
 8. 咸平長年里長鼓山古墳 9. 咸平杓山1号墳 10. 務安高節里古墳 11. 長城鈴泉里古墳  
 12. 潭陽古城里月城山1号墳 13. 潭陽聲月里月田古墳 14. 光州双岩里古墳 15・16. 光州月桂洞1・2号墳  
 17. 光州明花洞古墳 18. 羅州伏岩里古墳群 19. 務安九山里古墳 20. 羅州潘南古墳群  
 21. 靈岩泰洞里チャラボン古墳 22. 海南龍頭里古墳 23. 海南方山里長鼓峰古墳  
 24. 海南新月里方形葺石墳 25. 海南月松里造山古墳 26. 和順千德里懷徳3号墳

図12 榮山江流域の前方後円墳と主な在地系高塚古墳

墳が築造されており、この点においても両者の差異性は認められる [朴天秀 2002: 図12]。

以上のような在地系の墓制との比較と13基という造営数を考慮すれば、柴山江流域の前方後円墳は、在地化しない特殊な墓制というよりは、ある程度の定型性が認められるもう1つの墓制として評価できそうである。すなわち、在地系の高塚古墳と前方後円墳という、相互に共通性を有しつつも墳墓としての用いられ方が相異なる2つの墓制が盛行していたと把握すべきであろう。

## 2 古代交通路と前方後円墳

**交通路との関わり** 前方後円墳を造営する集団と高塚古墳を造営する集団の政治経済的關係はいかなるものであったのか。ここでは古代交通路との関わりから検討する。

在地系の高塚古墳との立地関係や古代交通路を考慮し、柴山江流域の前方後円墳の歴史的意味合いを見出したのは、朴天秀である。氏は、柴山江流域の前方後円墳それぞれが在地勢力に対する牽制や交通路の遮断などを意図して、百濟中央によって配置されたと解釈し、その被葬者像を倭系百濟官人と想定した [朴天秀 2005]。その根拠の1つとして提示したのが、当時の中核域であった羅州潘南古墳群と蘆嶺山脈以北の高敞雅山面鳳德里古墳群を結ぶ交通路と、前方後円墳の立地関係である。氏は前方後円墳が「全羅北道南部の在地勢力の最大の中心地である雅山地域を西方から制圧し、柴山江流域とこの地域との関係を遮断するように配置されている」 [朴天秀 2005: p.68] とした。ここでは氏の検討を踏まえ、踏査や古地図に基づきつつ、新納泉が作成したGISmapというソフトウェアの最適経路計算機能を利用し、その交通路を推定してみた (図13)。

この潘南-雅山交通路に近接する位置には、在地系の高塚古墳 (北から鳳德里古墳群-米出 (金山里) 古墳-高節里古墳・九山里古墳-潘南古墳群) や前方後円墳 (北から七岩里古墳-月桂1号墳-長鼓山古墳-杓山1号墳)、そして百濟的な古墳群 (靈光鶴丁里デチョン古墳群) が分布し、それらの立地の選定や築造過程において、この交通路が重要な役割を果たしていたことは認められる。

また、この交通路は朝鮮半島西海岸沿いを走っており、海から運ばれてくる様々な人や物資、技術、情報についても容易に受容し、双方向的に展開させていくことが可能であったと考えられる。例えば、鳳德里推定方形墳では在地系の土器とともに須恵器系土器や百濟系、加耶系(?)の土器が出土している [湖南文化財研究院・全羅北道 2003 図14]。また、鳳德里1号墳や羅州新村里9号墳 [国立文化財研究所 2001b] では、各種の百濟系装身具が確認されている。そして、高敞地域を中心に分布する短脚の台付杯 (いわゆる高敞系土器) が、蘆嶺山脈をこえ柴山江流域の古墳に副葬され

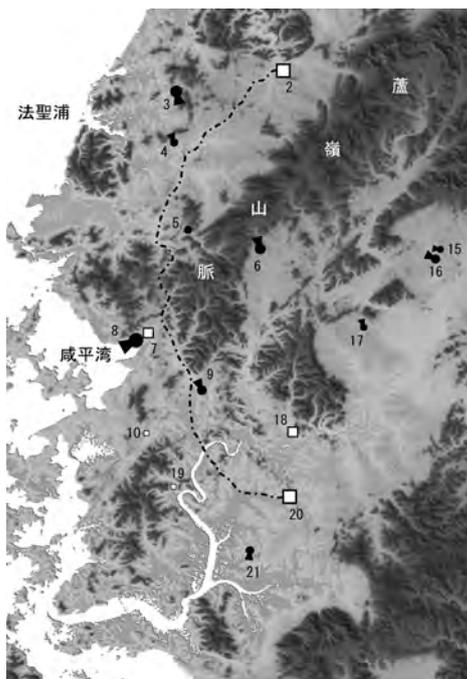


図13 推定交通路 (遺跡番号は図12と同じ)

る状況〔酒井2005, 徐賢珠2006など〕も明らかとなっている。

問題は、5世紀後葉から6世紀前前半頃にかけて、北から七岩里古墳-月桂1号墳-長鼓山古墳-杓山1号墳と、前方後円墳もこの交通路の一带に築かれる状況にある。潘南-雅山交通路をめぐる在地系の高塚古墳と前方後円墳の関係性に迫る鍵は、両者の墳墓としての差異性と共通性であろう。

**併存する在地系の高塚古墳と前方後円墳** まず、墳丘形態は無論のこと、墳墓としての用いられ方が両者で相異なるという差異性に注目すれば、前方後円墳という新たな墓制の成立には、それを自らの墓制としていた倭系渡来人集団の深い関与が必要であったことは想定できる。長期的な倭と栄山江流域との交流関係の中で、特にこの時期に栄山江流域への往来を頻繁に重ね、一部が定着し地域社会へ溶け込んでいった倭系の集団によって、前方後円墳をめぐる様々な物資、技術、情報をもたらされたと想定することは、それほど無理のない見方であろう。特に、墳丘構築と並行しつつ九州系の横穴式石室を構築する技術伝統は、当時の栄山江流域には認めがたく、九州地域においてその構築に携わった技術者集団の直接的な関わりが不可欠である。

次に、埋葬施設や棺、外表施設、そして副葬品などに認められる両者の共通性に注目すれば、在地系の高塚古墳の造営集団が、倭や百濟からさまざまな墓制に関する情報を入手し得る環境にあったこともまた確かである。それらに関する人、物資、技術、情報の伝達に、潘南-雅山交通路が活

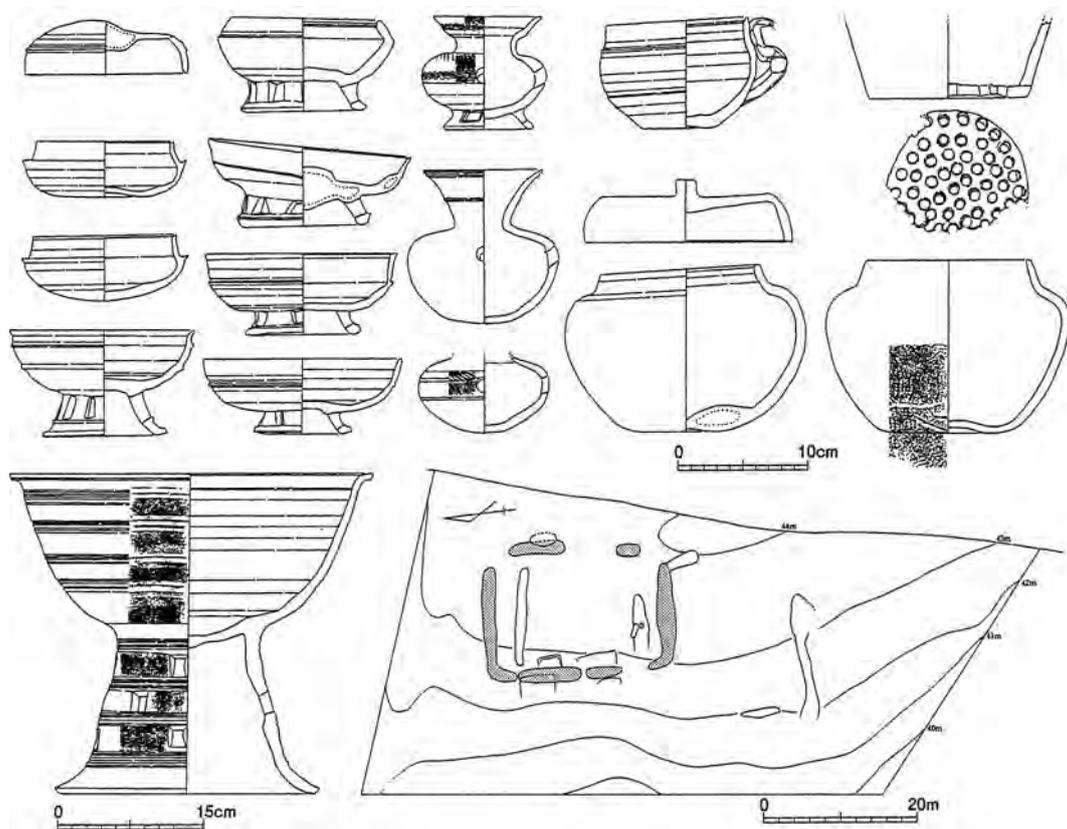


図14 高敞鳳德里推定方形墳周溝出土の土器(一部)

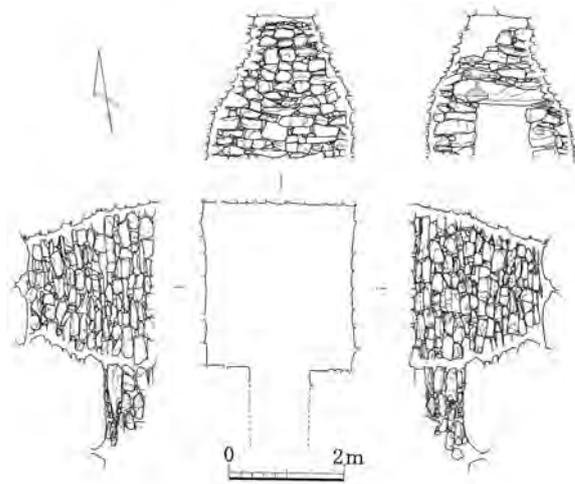


図15 羅州松堤里古墳の横穴式石室

用された可能性は高い。近年出土が相次ぐ冠や飾履などの百済系装身具、あるいは釘や鏝を用いた木棺の存在〔洪漕植 2005〕は、百済とも政治経済的関係を有していたことを端的に示す。その点で百済系とされる羅州松堤里古墳の横穴式石室の年代と系譜も再評価する必要がある（図15）。

朴天秀が唱えるような、在地勢力に対する牽制や交通路遮断のために前方後円墳を配置したという論〔朴天秀 2002・2005 など〕においては、在地系の高塚古墳と前方後円墳の関係性は対立的、排他的に把握する視角が前提と

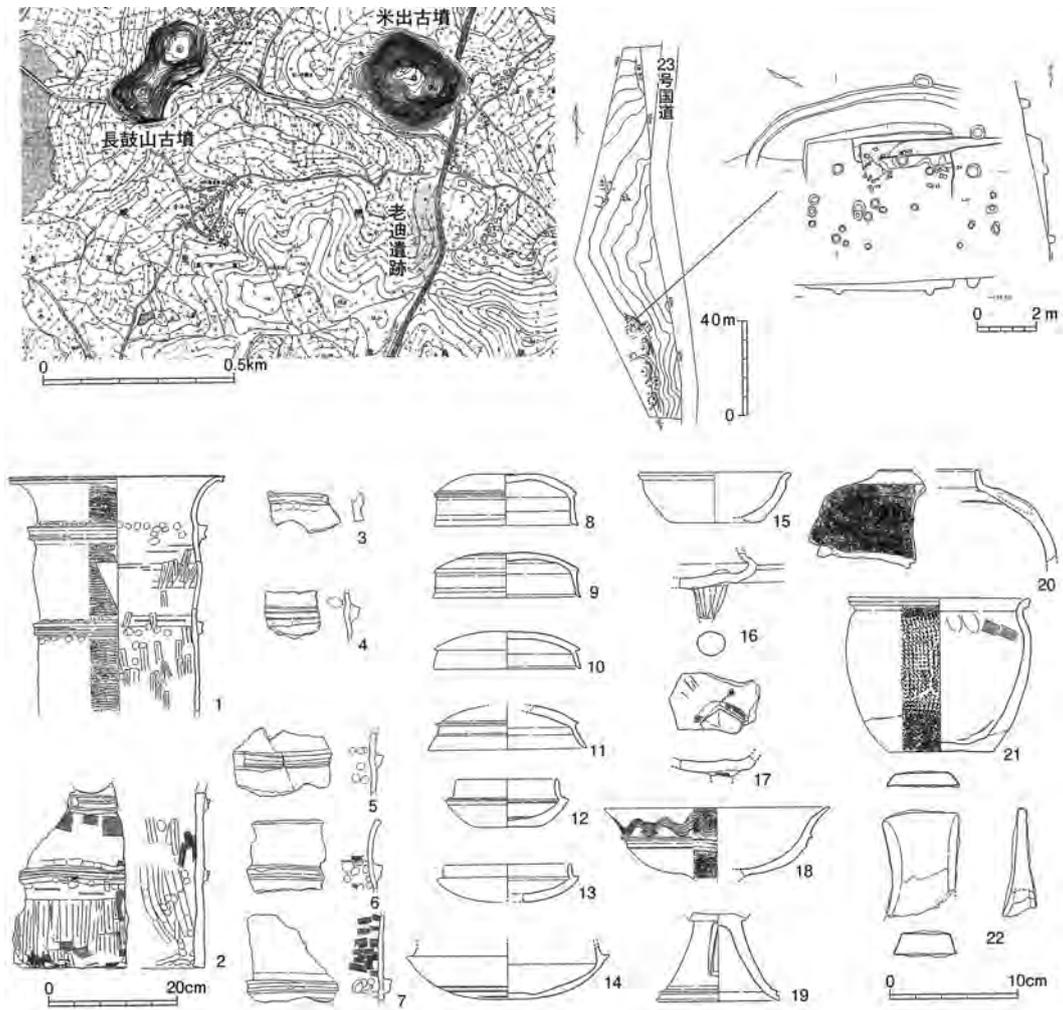
なっている。しかし、地政学的な環境や考古学的資料による限り、高塚古墳であれ前方後円墳であれ、造営集団が潘南－雅山交通路など様々な交通路を利用した「地域ネットワーク」に参画し、新来の墓制を受容していたという点においては、両者はむしろ併存的と評価すべきである。

**倭系渡来人の手がかり** 以上のような想定は、咸平湾沿岸地域において前方後円墳である長鼓山古墳と在地系の高塚古墳である金山里米出古墳が隣接して築かれている状況からも端的に傍証される。最後に、両古墳の造営に関わったと想定される集落遺跡の様相から、倭系渡来人集団の存在可能性についての手がかりを得たい。その遺跡は、咸平老迪遺跡カ地区〔湖南文化財研究院 2005〕である（図16）。

老迪遺跡カ地区は、潘南－雅山交通路に面する丘陵斜面に営まれた集落遺跡で、長鼓山古墳や米出古墳と近接した位置関係にある。オンドル付竪穴住居7棟をはじめとして、竪穴、溝などが確認された。出土遺物から、5世紀後半から6世紀前半頃を中心時期とする短期的な集落と想定されている。

この遺跡で注目すべきは、住居址や堆積土中から埴輪（円筒形土製品）が13点出土したこと（1～7）や、在地系、百済系の土器の他に須恵器系土器が出土したことである。埴輪（円筒形土製品）は、全体的な器形や突帯の形状や透孔を有する点などは日本列島資料と相対的に類似する。最下段の縦ナデ調整が認められるものもあるが、外面調整はほとんどがタタキ調整であり、在地の工人によって製作されたことは明らかである。報告書では「隣接する咸平長鼓山古墳出土品と同一の製品」と評価しており〔湖南文化財研究院 2005:p.88〕、米出古墳でも、同様の埴輪が出土している。一方で、須恵器系土器は在地における生産か倭からの搬入品かの区別は難しいが、実見の結果、杯身（14）は須恵器と同一の製作技術によるものと判断される。

地理的状況や集落の存続期間からみても、長鼓山古墳や米出古墳などの造営に関わった可能性が高い集落遺跡から、須恵器系土器や埴輪（円筒形土製品）が出土した状況は示唆的である。踏み込めば、集落の構成員には、地域社会の中に定着し在地化していく倭系渡来人が含まれていた可能性



1~4・15. 2号住居址出土品 21・22. 5号住居址 8. 6号住居址  
11. 3号堅穴 18. 5号堅穴 5~7・9・10・12~17・19・20. 地表採集品

図16 咸平老迪遺跡力地区の位置と出土遺物(一部)

があるのではなかろうか。

実際に、この頃の柴山江流域各地の集落遺跡から、須恵器系土器が少なからず出土している [李映澈2011a]。今後は、煮炊きなどに関わる土師器系土器が、どの程度集落遺跡から出土するかについて注意する必要がある。それでも、光州香燈遺跡 [湖南文化財研究院2004] のように、造営期間が5世紀後半~6世紀前葉頃と短期間で、土器や鉄製品の製作に従事したと想定される集落 [李映澈2011a] において、突帯や透孔が確認できる埴輪片や須恵器系土器が出土している場合、そこには倭系渡来人の何らかの関わりを考慮してもよいのかもしれない。<sup>(6)</sup>

### 3 前方後円墳造営の歴史的背景

**地域からの視座** これまでの議論に基づいて、前方後円墳の築造にいたる大まかな流れを柴山江流域の側から想定すれば、次のようになろう。

まず、長期的な百済、倭との基層的な交流関係の中で、前方後円墳や百済系の墓制に関する様々な人、物資、技術が栄山江流域にもたらされる。前方後円墳については、特に5世紀後葉から6世紀前半頃に諸地域集団との交流を重ねつつ定着・在地化した倭系渡来人集団が、その伝達に深く関与した可能性が高い。次に、栄山江流域の諸地域集団が、古代交通路を媒介とした地域ネットワークに参画する中で、この新来の墓制を総体的に、あるいは諸属性を取捨選択して受容する。そして、受容した様々な墓制に関わる情報に基づいて、埴輪（円筒形土製品）や木製品の製作に臨み、前方後円形の高塚墳丘を築き、おそらくは倭系技術者とともに石室構築に携わるなどして、それを自らの墓制として展開させていく。

鳥瞰的にみれば、羅州地域とその周辺域では、在地系高塚古墳の構成要素として横穴式石室や外表施設を取り込む動きが顕著であったのに対し、咸平、栄山江上流域、海南半島などの外縁域においては、前方後円墳の諸属性をある程度総体として受容していたと把握できる。したがって、前方後円墳か在地系の高塚古墳かという違いは、諸地域集団の立場からみれば、新来の墓制に対する主体的な取捨選択の結果、ひいては百済中央や倭系渡来人集団との関わり合い方の違いの結果と評価できる。

**岡山県天狗山古墳出土の土器群** 無論、この頃の栄山江流域の諸地域集団が倭へ赴いたことも確かであり、その関係は双方向的なものであった。栄山江流域と倭の交渉を示す日本列島側の資料については、すでに畿内地域や中・北部九州地域を中心に数多く紹介されている。ここでは、その狭間に位置する瀬戸内地域の事例について紹介したい。それは、岡山県天狗山古墳〔松木・新納2001〕の造出状遺構から出土した土器群である。

天狗山古墳は墳丘長60m程の帆立貝形前方後円墳である（図17）。その前方部西側に付設された造出状遺構に、5世紀後葉頃の須恵器杯身（8）とともに陶質土器の杯身、杯蓋が供献されていた。まず杯蓋の3点（1～3）は、栄山江流域、それも羅州地域からの搬入品である可能性は高い。もう1点（4）については、全体的な器形から須恵器杯蓋のように見受けられるが、天井部下半の器厚が非常に厚い点、天井部上半の外表面が回転ヘラ削りではなくナデ調整で仕上げられている点を勘案すると、須恵器とは考えがたい。むしろ、口縁端部や天井部と口縁部の境の段を須恵器と同様に形づくる、いわゆる高敞系土器の可能性が高い。その他にも、焼成が軟質で、蓋受け部が短厚でつまみ出しが非常に弱い杯身（4～7）も多く出土している。これも須恵器とは考えがたく、いまだに酷似する類例は見当たらないが、あるいは栄山江流域からの影響を受けた可能性はなかろうか。

天狗山古墳は瀬戸内北岸を伝う沿岸航路と河川（小田川と高梁川）の結節点に位置している。様々な朝鮮半島系副葬品が確認された古墳であり、海上交通を基盤としていた小田川下流域集団の首長墓と考えられる。その造出状遺構から栄山江流域系の土器が多数出土した状況を積極的に理解すれば、そこで執り行われた儀礼に栄山江流域からの渡来人集団が参加したと解釈することも可能であろう〔高田2014〕。

**前方後円墳の多義性** 前方後円墳築造の背景となった倭と栄山江流域との対外交渉には、北部九州地域を主体とした倭の側の対外経路の維持・展開という意図があったことがすでに指摘されている〔柳沢2006など〕。その一方で、銀装釘や鍔座金具を備えた木棺や百済系装身具類の副葬に、熊津遷都後の百済の栄山江流域に対する統合志向が反映された可能性も提起されている〔洪漕

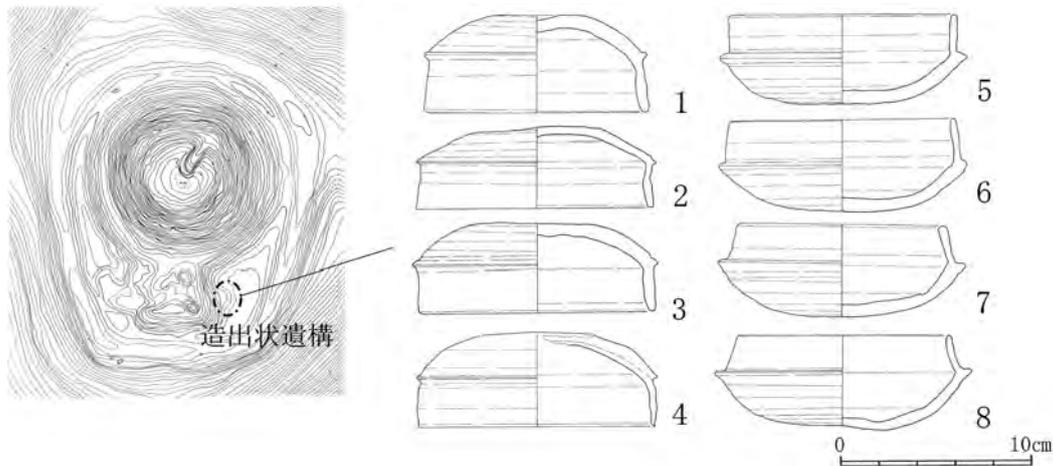


図 17 岡山県天狗山古墳と造出状遺構出土の土器

植 2005 など]。そして、栄山江流域の側には、新来の墓制の積極的な受容と展開によって、倭や百濟中央との等距離的な関係を維持しつつ、相互に連携も図るといった思惑があったことも指摘されている [田中 2002, 金洛中 2009 など]。

以上の諸見解は必ずしも相互に対立するものではない。それらに加えて、在地系の墓制と前方後円墳が、微妙な力学的な関係においてむしろ併存的であったとみることが可能であれば、栄山江流域の前方後円墳は、ある特定の政治体の政治経済的な意図が強く反映されたというよりは、築造から葬送儀礼に至る一連の過程において、栄山江流域（の前方後円墳造営集団）を主体としつつも、倭、百濟などの政治経済的思惑も内包された多義的な墳墓であったと評価できる。

そこに葬られた被葬者は、基本的には百濟や倭と緊密な関係を有した栄山江流域の諸地域集団の首長層と考えられるが、その首長層に百濟、倭に出自を有する人々が含まれていた可能性もまた、考慮しておく必要はある。

## おわりに

本稿では、朝鮮半島の西・南海岸地域や栄山江流域の視座から当該地域に分布する「倭系古墳」や前方後円墳を分析することで、5世紀前半、5世紀後葉から6世紀前半、の2つの時期における朝鮮半島西南部と日本列島の間で積み重ねられた政治経済的な交渉の実態を検討することに努めた。事象の把握に関して誤解や不備も少なくないであろうし、百濟との関わりを十分に把握できていないことも確かである。それでも、当時の朝鮮半島西南部と日本列島の多元的で錯綜した関係の中で、「倭系古墳」や前方後円墳が造営された状況を、少しでも説明できていれば、と願う。

---

註

---

(1)——本稿では「倭系古墳」について、とりあえず「朝鮮半島において倭の墓制を総体的に取り入れて造営された古墳」として括弧付きで定義しておきたい。具体的には墳形、外表施設(葺石や埴輪)、埋葬施設、そして副葬品の構成において、倭の墓制の要素が認められる古墳のことを指す。この定義においては、本稿の後半で検討対象とする栄山江流域の前方後円墳もまた「倭系古墳」となる。ただ、これまでの研究によって、このような古墳には、在地、もしくは倭以外の政治勢力の墓制の要素が混在している状況が明らかになりつつあるので、厳密に「倭系古墳」を定義することが難しいことは確かである。ただし、筆者はその多様性に注目しているため、上述した要素の複数において倭的な要素が認められたものについては、「倭系古墳」と呼称する。

(2)——筆者は、日本国立歴史民俗博物館と大韓民国国立文化財研究所との学術交流の一環として、2012～2016年度の各10日間程度、国立羅州文化財研究所に滞在した。その際に高興野幕古墳や羅州丁村古墳の発掘調査に参加させていただき、栄山江流域や朝鮮半島西・南海岸地域の「倭系古墳」と関連遺跡を踏査することができた。また2014年度より3年間、大韓文化財研究院とともに、本報告作成の基礎となった栄山江流域社会と倭の交渉に関する共同研究も行った。本稿の作成は、このような踏査や共同研究の知見に大きく依っていることを明記しておきたい。

(3)——高田2012の段階には当初5世紀後半頃の造営と考えていたが、副葬土器や鐔付鉄銚の時期から判断し

て、外島1・2号墳とさほど造営時期の差は認めたいと見解を修正するに至った。

(4)——第2節の記述は高田2012の内容を踏まえたものであり、研究史の整理もそこで行っている。

(5)——5世紀前中葉頃の「方台形墳」の出現については、その孤立的な立地や外来系の埋葬施設や副葬品から、百済や倭の墓制との関わりも指摘されている。筆者は、それらの外来的な要素を取捨選択し在地の墓制に受容しつつ、ある程度の定型性を有する「方台形墳」という墓制をうみだした主体は、活発な対外交渉をおこなった栄山江流域の諸地域集団であったと推測する。この点は、外来的な埋葬施設とされる堅穴系横口式石室を対象として指摘したことがある[高田貫太2016]。そのような意味あいにおいて5世紀前中葉頃「方台形墳」を「在地系」の墓制と評価している。

(6)——李暎澈は、5世紀後半以降には、光州月桂洞1・2号墳や光州明花洞古墳などの前方後円墳が位置する栄山江上流地域の集落構造に大きな変動があり、位階化と専門化が進展すると指摘している[李暎澈2011a]。傾聴すべき見解であろう。氏は、そこに百済による直接的な支配を読み取っている。当該期の集落においては、埴輪(円筒形土製品)、須恵器系土器、大加耶や小加耶を中心とした諸加耶系の土器が少なからず出土している。このような多様な系譜を有する資料の評価も含めて、集落の様相を絡めつつ前方後円墳造営の背景を紐解いていく必要がある。

---

主要参考文献

---

(紙幅の関係上、本論において言及したものに限って挙げた。)

(韓国語文献)

高興郡・大韓文化遺産研究センター 2011『高興掌德里簞洞遺跡』

権宅章・이건용・이진우 2013『高興野幕古墳の発掘調査』『2013年遺跡調査発表会発表資料集』韓国考古学会・韓国文化財調査研究機関協会

公州大学校博物館・天安温泉開発・高麗開発 2000『龍院里古墳群』

国立光州博物館 1988『羅州潘南古墳群』

国立光州博物館・海南郡 2001『海南方山里長鼓峰古墳試掘調査報告書』

国立羅州文化財研究所 2011『栄山江流域の古代古墳精密分布調査報告書』

国立羅州文化財研究所 2012『霊岩沃野里方台形古墳 第1号墳発掘調査報告書』

国立羅州文化財研究所 2014a『古墳を通してみた湖南地域の対外交流と年代観』第1回古代古墳国際学術大会

国立羅州文化財研究所 2014b『高興野幕古墳発掘調査報告書』

国立文化財研究所 2001a『羅州伏岩里3号墳』

国立文化財研究所 2001b『新村里9号墳』

---

- 金 洛 中 2009『栄山江古墳研究』ソウル大学校大学院文学博士学位論文
- 金 洛 中 2013「5～6世紀南海岸地域の倭系古墳の特性と意義」『湖南考古学報』45 湖南考古学会
- 大韓文化遺産研究センター編 2011『韓半島の前方後円墳』学研文化社
- 大韓文化財研究院 2014『栄山江流域の古墳土木技術の旅程と時間を求めて』大韓文化財研究院 2014 下半年国際学術大会
- 東新大学校文化博物館 2015『新安安佐面邑洞・ベノルリ古墳群』
- 馬韓文化財研究院 2011『寶城虎東・高興新村遺蹟』
- 馬韓・百濟文化研究所・高敞郡 2012『高敞鳳德里1号墳』
- 木浦大学校博物館・益山地方国土管理庁 2000『靈光鶴丁里・咸平龍山里遺蹟』
- 木浦大学校博物館・益山地方国土管理庁 2002『務安高節里古墳』
- 木浦大学校博物館・海南郡 2010『海南新月里古墳』
- 木浦大学校博物館・鉄道庁 1999『務安インピョン古墳群—鶴山・九山里古墳群—』
- 朴 天 秀 2007『新たに叙述する古代韓日交渉史』社会評論
- 徐 賢 珠 2006『栄山江流域における三国時代土器研究』ソウル大学校大学院文学博士論文
- 新安郡・東新大学校 2011『安佐面邑洞古墳およびベノルリ古墳発掘調査 現場説明会資料』
- 李 暎 澈 2011a「栄山江上流地域の集落変動と百濟化の過程」『百濟学報』6 百濟学会
- 李 暎 澈 2011b「高興掌德里獐洞において確認された多葬壇丘墓伝統の梯形古墳の築造背景と課題」『高興掌德里獐洞遺蹟』高興郡・大韓文化遺産研究センター 2011
- 李 漢 祥 2011「高興吉頭里雁洞古墳の金銅冠帽と金銅飾履についての検討」『高興吉頭里雁洞古墳の歴史的 성격』全南大学校博物館
- 全南大学校博物館 2011『高興吉頭里雁洞古墳の歴史的 성격』
- 全南大学校博物館・全羅南道 2000『全南地域古墳測量報告書 2』
- 全南大学校博物館・(財) 湖南文化財研究院・文化財庁・高興郡 2015『高興吉頭里雁洞古墳』
- 崔 盛 洛・李 正 鎬ほか 2000「羅州松堤里石室墳実測調査」『紫微山城』羅州市・木浦大学校博物館
- 忠清南道歴史文化研究院・孝昌綜合建設 2008『瑞山富長里遺蹟』
- 湖南文化財研究院 2004『光州香燈遺蹟』
- 湖南文化財研究院 2005『咸平老迪遺蹟』
- 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁 2006a『高興寒東遺蹟』
- 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁 2006b『高興訪士遺蹟』
- 湖南文化財研究院・全羅北道 2003『高敞鳳德里遺蹟 I』
- 洪 漕 植 2005「栄山江流域古墳の性格と推移」『湖南考古学報』21 湖南考古学会  
(日本語文献)
- 上野祥史 2012「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
- 大野城市教育委員会 1985『笹原古墳』
- 岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団 2014『天狗山古墳』
- 酒井清治 2005「韓国栄山江流域の土器生産とその様相—羅州勢力と百濟・倭の関係—」『駒澤考古』30 駒澤大学考古学研究室
- 志免町教育委員会 2001『国指定史跡 七夕池古墳』
- 鈴木一有 2012「七観古墳 1913 年出土遺物の歴史的 position」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
- 鈴木一有 2014「七観古墳出土遺物からみた鋳留技法導入期の実相」『七観古墳の研究』七観古墳研究会
- 高田貫太 2002「朝鮮半島南部地域の三国時代古墳副葬鉄銚についての予察」『古代武器研究』3 古代武器研究会
- 高田貫太 2006「5.6 世紀の日朝交渉と地域社会」『考古学研究』53-2
- 高田貫太 2012「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的 background」『古墳時代の考古学 7 内外の交流と時代の潮流』同成社
- 高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係—百濟・新羅・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館
- 高田貫太 2015「日本列島における百濟関連の海上交通路と寄港地」『百濟と東北亞の海上交通路と寄港地』第 20 回百濟学会定期学術会議
- 高田貫太 2016「[「堅穴系横口式石室・堅穴式石室・木槨の構造」『韓日の古墳』「日韓交渉の考古学—古墳時代(三国時代)—」研究会

- 
- 田中俊明 2002「韓国の前方後円形古墳の被葬者・造墓集団に対する私見」『前方後円墳と古代日朝関係』同成社  
朝鮮学会編 2002『前方後円墳と古代日朝関係』同成社  
朴 天 秀 2002「柴山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古学研究』49-2 考古学研究会  
朴 天 秀 2005「柴山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」『日韓交流展 海を渡った日本文化』宮崎県立西都原考古博物館  
橋本達也 2014「中期甲冑の表示する同質性と差異性—変形板短甲の意義—」『七観古墳の研究』七観古墳研究会  
松木武彦・新納 泉 2001『吉備地域における「『雄略朝』期」の考古学的研究』科学研究費補助金研究成果報告書  
岡山大学文学部  
森井 正 1966「高松市女木島丸山古墳」『香川県文化財調査報告』8 香川県教育委員会  
柳沢一男 2006「5～6世紀の韓半島西南部と九州」『加耶, 洛東江から柴山江へ』金海市  
山尾幸久 1999「倭王権と加羅諸国との歴史的関係」『青立学術論集』15 韓国文化研究振興財団
- 

#### 図出典

(すべて一部改変の上で転載)

- 図1 1: 東新大学校文化博物館 2015 2: 国立光州博物館・海南郡 2001 3: 権宅章ほか 2013 4: 筆者撮影  
図2 国立羅州文化財研究所 2014, 東新大学校文化博物館 2015  
図3 1: 大野城市教育委員会 1985 2: 志免町教育委員会 2001  
図4 国立羅州文化財研究所 2011 下段の写真は筆者撮影  
図5・6 高興郡・大韓文化遺産研究センター 2011  
図7 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁 2006a・b  
図8 埋葬施設・3: 木浦大学校博物館・海南郡 2010 1: 公州大学校博物館・天安温泉開発・高麗開発 2000 2: 忠清南道歴史文化研究院・孝昌総合建設 2008  
図9 森井 1966, 高田 2014 左段の写真は筆者撮影  
図10～13 高田 2012 国立文化財研究所 2001a・b  
図14 湖南文化財研究院・全羅北道 2003  
図15 崔盛洛・李正鎬ほか 2000  
図16 湖南文化財研究院 2005  
図17 岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団 2014, 高田 2014

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年3月23日受付, 2017年7月31日審査終了)

---

## **An Analysis of the Background of Japanese-style Tombs Built in the Southwestern Korean Peninsula in the Fifth and Sixth Centuries**

TAKATA Kanta

In the southwestern Korean Peninsula, some tombs were built based on the burial practices of Yamato in the fifth and sixth centuries. While recent studies are elucidating the background of these Japanese-style tombs, this article broadly examines the background of Japanese-style tombs built in the southern and western coastal areas of the Korean Peninsula in the early fifth century and keyhole tombs built in the Yeongsan River Basin in the late fifth and early sixth centuries.

Japanese-style tombs built in the southern and western coastal areas of the Korean Peninsula in the early fifth century were characterized by their nearness to the sea and their burial practices informed by those of small and medium-sized tombs in the northern Kyūshū region. These characteristics imply that the occupants of Japanese-style tombs had not assimilated into the local culture and were buried as foreigners. They seem to have been Japanese immigrants who played a substantial role in negotiations between Yamato and Baekje or other kingdoms in the Yeongsan River Basin. Moreover, the diversity in grave goods unearthed from local-style tombs in the southern and western coastal areas indicates the existence of local clans thriving with marine trades. The active engagement of such local clans based in major hubs along trade routes seems to have strengthened diplomatic relations between Yamato and Baekje or other kingdoms in the Yeongsan River Basin.

Keyhole tombs and local-style burial mounds built in the Yeongsan River Basin in the late fifth and early sixth centuries have similarities and differences in their burial practices. Although most previous studies suggested that they had been exclusive or opposed to each other, the fact that all of the clans that built these tumuli participated in a regional network of various trade routes and accepted new burial practices from Yamato and Baekje implies that these two styles of tumuli coexisted without excluding each other. From the perspective of local clans themselves, the selection between keyhole tombs and local-style burial mounds was a mere result of their decisions on what new burial practices to adopt and what relations to build with the central government of Baekje and Japanese immigrants.

In this sense, Japanese-style tombs in the Yeongsan River Basin are principally attributed to chiefs of local clans who had close relationships with Baekje and Yamato. Given that these local clans interacted so actively with Baekje and Yamato and that some of immigrants may have settled in the basin, it is also worth considering the possibility that some of the chiefs interred in Japanese-style

tombs originally came from Baekje or Yamato.

Key words: Yeongsan River Basin, keyhole tomb, Japanese-style tomb, immigrant, Kofun period